

# 福島県立医科大学 学術機関リポジトリ



Title	国際ミニ学会に学部の学生とともに参加して：学術活動
Author(s)	黒田, るみ; 須賀原, 舞
Citation	福島県立医科大学看護学部紀要. 25: 49-52
Issue Date	2023-03
URL	<a href="http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/1985">http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/1985</a>
Rights	© 2023 福島県立医科大学看護学部
DOI	
Text Version	publisher

This document is downloaded at: 2024-05-06T08:09:52Z

# 学 術 活 動

## 国際ミニ学会に学部の学生とともに参加して

黒田 るみ（基礎看護学部門）  
須賀原 舞（基礎看護学部門）

### 1. はじめに

2022年度、国際交流センターの4月定例会で紹介された3<sup>rd</sup> Summer International Mini-Conference on Careers in Applied Sciences に、看護学部の学生11名が参加した。この学会は、会津大学が主催の国際学会で、本学を含む全6大学（Karlsruhe University of Applied Science（ドイツ）、Christ University（インド）、University of Western

Macedonia（ギリシア）、University of Monterrey（メキシコ）、The University of Aizu（日本）が参加しており、学部学生の英語での発表や国際交流の機会の提供が開催主旨の1つであった。その学会への参加を決めた学生11名は、5月18日から8月31日までの約3ヶ月半をかけて、テーマの決定から最終抄録の提出まで、一連の過程に取り組んだ。本稿では、その取り組みの概要と、活動評価および今後の課題について報告したい。

### 2. 活動の概要

日 付	活動の概要	備 考
2022. 5/18 16:40-17:30	第1回説明会および実施に向けた検討会 (教員：黒田・須賀原)	学部生11名が参加。2Gに分かれ、テーマを検討
6/15	200wordの英文抄録提出 native check (Dr. Maham Stanyon)	【資料1】【資料2】参照
6/23 17:50-18:30	講義「質的分析について（取材について）」 (教員：黒田)	・対面にて実施
6/30 16:40-18:00	講義“How to present a talk in English” (Dr. Maham Stanyon)	・対面にて実施
7/11 17:30-18:30	第1回発表予演会 (教員：黒田・須賀原)	・対面にて実施
7/23 20:00-22:00	第2回発表予演会：英語による発表への指導 (後藤あや教授)	・Zoomにて実施
7/25 12:10-12:50	International Mini-Conferenceでの発表	・各グループ20分の発表（Zoom）
8/30	A complete short paper (3-4pages) native check (Dr. Maham Stanyon)	・修正が十分にできたとは言えないが、期限内に提出

### 3. 発表テーマとグループ活動の概要

#### 1) グループ1について

##### (1) テーマ

日本の看護師は患者の価値観や意見を尊重したケアをどのように行なっているのか

How Japanese nurses provide care that respects the

values and opinions of patients

##### (2) メンバー

3年：櫻井武雄，2年：田原里名，1年：高橋希園，安田慎太郎，緑川美月

##### (3) 活動の概要

学生からの提案で、「さまざまな臨床現場で、実際に看護実践を行なっている臨床看護師の方々に、直接患者と関わった経験について話を聞いてみよう」とい

うことになり、インタビューガイドを作成した。また、話を聞いてみたいと思う領域等を学生たちがリストアップし、そのリストに基づき、教員が協力依頼をし、インタビューの日時・場所・方法を調整した。その後、学生たちがインタビューを対面あるいは遠隔で行い、語られた内容をもとに、発表内容をまとめていった。

## 2) グループ2について

### (1) テーマ

災害前後の医療システムに対する日本の看護師の印象を探る：福島における困難に耐えうる看護の未来を築くために

Exploring Japanese nurses' impressions of a healthcare system pre- and post-disaster: building a resilient future for nursing in Fukushima

### (2) メンバー

2年：末永遥香，1年：熊谷茉莉，宗像莉沙，山下遥香，今野真伸，市川七海

### (3) 活動の概要

学生からの提案で、「福島県から発信するのだから、災害看護について、リスクマネジメントとクライシスマネジメントの視点から検討したい。そのために、まず文献を読むことと、災害看護専門の教員や臨床の職員の方に、東日本大震災当時のことについてインタビューをしよう」ということになり、教員の方で、災害・被ばく医療科学共同専攻国際被ばく保健看護学講座の佐藤教授に協力依頼をした。その後、佐藤教授の調整により、インタビュー、放射線災害医療センターの見学等を行った。インタビュー時に語られた内容、施設見学や震災当時の説明、文献検討の結果をもとに、発表内容をまとめていった。

## 4. グループ活動への協力および支援について

### 1) グループ1：「日本の看護師は患者の価値観や意見を尊重したケアをどのように行っているのか」

学生からの希望に即して、以下の方々にご協力いただいた。

(インタビューへの協力)

附属病院10階東病棟主任看護技師 小林 浩之氏

附属病院みらい棟5階主任看護技師

三浦 貴裕氏

附属病院5階東病棟副主任看護技師 深谷現予子氏

附属病院外来診療部門副主任看護技師

長澤 秀佳氏

附属病院3階東フロア手術部看護技師

佐藤 健斗氏

看護学部 (元附属病院救命救急センター看護師)

須賀原 舞 助手

中国の看護について

國井 享奈氏

ベトナムの看護について Duong Thi Thu Huong 氏

アメリカの看護 (NPとしての看護実践) について

神崎 桂子氏

### 2) グループ2：「災害前後の医療システムに対する日本の看護師の印象を探る：福島における困難に耐えうる看護の未来を築くために」

学生からの希望に即して、以下の方々にご協力いただいた。

(インタビューへの協力およびコーディネート)

大学院医学研究科 災害・被ばく医療科学共同専攻

国際被ばく保健看護学講座 佐藤 美佳 教授

(放射線災害医療センターの見学案内)

附属病院災害医療部主任看護技師 佐藤 良信氏

附属病院災害医療部副主任放射線技師

角田 和也氏

(インタビューへの協力)

看護学部 (元附属病院救命救急センター看護師)

須賀原 舞 助手

### 3) 英語について

英語による抄録やパワーポイント原稿、発表原稿の作成に関して、以下の方々にご指導いただいた。

総合科学教育研究センター 後藤 あや 教授

医療人育成・支援センター Dr. Maham Stanyon

総合科学教育研究センター 安田 尚子 教授

## 5. 学生の学びと新聞への掲載記事について

1) 7月25日の発表直後、学生から寄せられた感想は、以下の通りであった。

- 授業とは異なる視点で看護学を学び、それを英語でアウトプットすることの経験は、学問をしていく上で、とても有意義だったと思います。グローバルなものは、ほとんど英語で物事が進んでいくことを考えると、まだまだ自分の英語力を育てる必要があるとも思いました。今後、似たような機会があれば、ぜひ参加したいと思います。
- 看護について現状を知り、課題を考え、これからどうしていくべきなのか模索する過程は大変でしたが、とても良い経験になったと思っています。また、研究にあたって協力してくださった方々には感謝しかありません。また、来年もぜひ参加したいと考えています。次は、もっともっと深く研究し、突き詰めたいと考えています。
- グループで話し合えたことや、インタビューで知ら

なかったことを知ることができたこと、本当に楽しかったです。発表の仕方やインタビューのまとめ方など、1から教えていただいたおかげで、何とか発表できました。今後も活動を継続できるのであれば、ぜひ参加したいです。

- 次回も参加したいと思います。次回は、もっと期間を設けて、少し余裕を持って進められたらと思います。そのために、実践的な英語のトレーニングの機会もたくさんほしいです。仲間みなさん、ありがとうございました。
- 自分たちの分野以外の方々にもお話が聞けて、今まで知らなかったことを知ることができました。今回の経験を活かせるように今後の学生生活を送っていききたいと思います。
- 看護学の分野について、より学びを深められたと思います。また、英語力についても、これからも努力し続けなければならないと痛感いたしました。今回は貴重な体験もたくさんでき、参加してみてよかったと心から思いました。今回経験したことを活かせるようにします！
- すべて英語での発表は久しぶりで楽しかったです。インタビューなどでたくさんの方からお話が聞けて、とてもいい経験になりました。今回の経験を活かして、これからも目標に向かって頑張っていきます!!
- 今回、様々な医療現場のことを聞いて勉強になっただけでなく、自分が学ぶべきことは、まだまだたくさんあるのだと痛感しました。参加できて本当に良かったです！
- 発表の準備には、大変なことも多くありましたが、その度に仲間や先生方に支えていただき、思い切って参加して、本当に良かったなと思います。看護についての学びが深まっただけでなく、インタビューでの姿勢やまとめ方、発表の仕方など、研究そのものについても多く学ぶことができました。ただ、自分に英語力がなかったことが本当に後悔です。自主的に英語の学習に取り組み、次にまた同じような機会があれば参加させていただきたいです。
- 今日まで、インタビューへのご協力から毎回の会場予約、原稿の確認など、本当にありがとうございました。看護師の方に限らず、様々な職種の方に話を伺うことができたため、より一層、知識や考えが深まりました。また、先生方と、このように授業以外で話し合う機会もないため、とても有意義な時間を過ごさせていただいたと感じています。まだ、最終的な抄録の提出も残っており、さらにこれから深めていける内容なので、来年もぜひ参加したいと思っ

ています。また、英語の勉強会や、他の学会などがありましたら、声をかけていただけると嬉しいです。

- 2) 2社の新聞に掲載された記事の抜粋は以下の通りであった。
  - 8/15福島民報社新聞10面に掲載された。「医療のあり方考える 会津大と福島医大海外とオンライン交流…ミニ学会では学生の各専門分野のキャリア展望、シンポジウムではITや建築分野の知見を交えてのより良い医療のあり方などについて、学生が英語で発表した。」
  - 8/15福島民友新聞8面に掲載された。「県内と海外の大学生が交流…中心となって開催した会津大のデボプリオ・ロイ教授は『学生が英語で発表することで自信をつけ、他大学の研究に理解を深めることが目的』と意義を説明」

## 6. 本活動の評価と今後の課題

学生の学びにも記載されている通り、まず、この学会に看護学生として参加し、英語での発表を行ったこと自体、国際交流を進める上で貴重な一歩になったと考える。参加した11名は、必ずしも英語を得意とする学生ばかりではなく、また学年も異なる集団であった。さらに、部活やアルバイトなど、学生個人の都合もそれぞれある中で、ラインを活用したり、昼休みや土曜日に集まったり、お互いの役割分担の不公平等を感じつつ、それでも最後までやり遂げることができたことは、傍で見ている立場からも、学生の潜在能力の高さや成長を感じる貴重な体験であった。また、臨地実習や国家試験など、制約の多い看護学基礎教育課程の教育現場における学士課程教育の在り方について、考えさせられる機会でもあった。卒業要件にも看護師国家試験にも直接的には関係のない、今回のような学生の知的関心に基づく主体的な学習体験こそ、将来の看護学分野の発展を担う人材育成に必要なのではないかと考えた。

その一方で、課題と感じたこともいくつかあった。1つ目は、英語力を訓練する機会の少なさである。週に1回は英語の授業を受けている学生であるが、語学力を高めるには、もっと頻繁に、日常的に活用する機会が必要である。今回の発表で、学生たちは手元に準備した英語の発表原稿を読み上げ、質問にはチャット機能を活用して英語で回答していたが、他者の発表に対して英語で質問をしたり、海外の学生と英語で交流をするには至らなかった。例えば、授業料とは別料金の選択コースとして、英語学習コースなどを設ける、また、筆者自身の担当する授業資料の専門用語を、日本語と英語の併記で作成するなど、可能なことから始めていきたいと考えている。

2つ目は、学部1～3年生は、研究の基礎についての授業すら受けていないため、研究を行うための研究計画書の作成、倫理審査の受審などを学生が自力で行うことはほぼ困難である、ということである。そのため、今回はインタビューに応じてくださった方々には、研究対象者ではなく、研究協力者として氏名を公表させていただくという対応をした。今後は、学会発表のために研究的な取り組みを新たに行うという方法だけでなく、臨地実習での自らの体験を振り返ってまとめた症例報告や、授業内でのグループワークを活かしたテーマの設定、また大学院生にも声をかけることなどにより、より学生の主体性を生かした学習の機会になると思われる。

以上を踏まえ、来年度も本取り組みを継続するとともに、国際交流やグローバルな視点を持つ看護学分野の人材育成に、少しずつでも貢献していきたいと考える。

**【資料1：日本の看護師は患者の価値観や意見を尊重したケアをどのように行っているのか】**

How Japanese nurses provide care that respects the values and opinions of patients

Takehiro Sakurai, Rina Tahara,  
Kino Takahashi, Shintaro Yasuda,  
Mizuki Midorikawa

**ABSTRACT**

Nurses are active both inside and outside the hospital, not only to assist in medical treatment for illnesses, but also to provide vital support to patients and their families. Such support includes reducing patient suffering and lessening the burden on their mental health. Since each patient holds their own unique combination of values and opinions, we believe that knowing and respecting these will lead to the provision of better nursing care. However, one of the current challenges in the field of Japanese nursing is developing skills to communicate effectively with patients to sufficiently understand their values and opinions. This is compounded by cultural factors, such as the spirit of harmony and modesty that is characteristic of Japanese society, which may cause patients to suppress their opinions on seeing nurses in the busy clinical environment; a situation that is further exacerbated by an absence of nurses from the workforce and an uneven geographical distribution of those currently working. In such a situation, 'nursing that respects the values and

opinions of patients' cannot be realized.

Therefore, we interviewed practising nurses to learn of their insights into the current state of nursing and how to provide care that 'respects the values and opinions of patients'. In this presentation we present our findings and examine how to shape the skillset of the nursing workforce of the future.

**【資料2：災害前後の医療システムに対する日本の看護師の印象を探る：福島における困難に耐えうる看護の未来を築くために】**

Exploring Japanese nurses' impressions of a healthcare system pre- and post-disaster: building a resilient future for nursing in Fukushima

Mari Kumagai, Haruka Suenaga,  
Risa Munakata, Haruka Yamashita,  
Masanobu Konno, Nanami Ichikawa

**ABSTRACT**

Our school is located in Fukushima prefecture, Japan, where we experienced the Great East Japan Earthquake 11 years ago. The great damage sustained from these disasters has had a lasting impact on the healthcare system, which we aim to explore in detail. With current efforts still focused on disaster recovery, we plan to interview various experts to find out how things have changed since the disaster, examine their role in disaster management and visit medical centers designed to respond to such situations. Through the interviews, we believe that it will be necessary to collaborate with a wide variety of professions beyond the framework of medical care. Through the interviews and visits to facilities, we will learn what is currently lacking, mainly from the perspective of nursing, so that we can improve the medical system in the future. Furthermore, we have decided to utilize "risk management" and "crisis management" to solve problems at the time of a disaster. Risk management is a countermeasure for what can be expected. Crisis management is the countermeasure for the unexpected. From the standpoint of students studying nursing in Fukushima, we would like to discuss how our experiences of disasters that have occurred in Japan will be utilized in the future of healthcare.